式　　辞

今年は久々に寒さの厳しい冬でしたが、それもようやく終わりを告げ、日に日に日差しが明るさを増し、医王の山々の稜線が、柔らかな光の中でくっきりと見られるようになってきました。

この春の佳き日に、PTA 会長小杉敬子様をはじめ多くのご来賓の方々のご臨席を賜り、本校第三十三回卒業証書授与式を挙行できますことは、私たち教職員にとりまして、大きな慶びとするところであり、心より厚くお礼を申し上げます。

ご列席いただきました保護者の皆様、今日の喜びと感慨は一入のことと拝察いたします。心からお祝いを申し上げますとともに、お子さまの入学以来、今日まで、本校にお寄せいただきました数々のご支援に対しまして、改めて感謝申し上げます。また、新型コロナウイルス感染予防のため、式に際して様々な制限を設けることとなりましたが、ご理解ご協力をいただきましたことに、重ねて感謝申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与いたしました、７３名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。皆さんの晴れの門出を心よりお祝いいたします。高校時代の三年間は、自己を確立する上できわめて重要な時期です。自分の歩むべき道を見極める決断の時であり、目標に向かって地道な努力を積み重ねることの大切さを知る期間でもあります。皆さんは、そんな大切な時間を本校で過ごし、人生を逞しく豊かに生きるための素地をしっかりと身につけてくれたと思っています。新しい人生に向かって旅立つ皆さんへのはなむけに、一人のアスリートのお話をします。

プロテニスプレーヤーの大坂なおみ選手を知っていますか。現在世界ランキング第二位となっている選手です。時速２００キロを超えるサーブを武器に、２０１８年、２０歳の若さで彼女は全米オープンという世界最高峰の大会の一つで優勝を飾りました。翌年、同じく最高峰の大会の一つ全豪オープンでも優勝したのですが、その後しばらくはひどいスランプに陥り、大会に出場しても早いラウンドで敗退することが続きました。しかし、そんな中でも彼女はくじけることなく努力を重ね、ようやく復調の兆しが見えてきた２０２０年、今度はコロナウイルスの感染拡大で各種大会がすべて一時中止となります。テニスが出来ないどころか外にも出ることが出来ない、そんな日が続きました。しかしそれでも強い気持ちを持ち続けて練習を重ね、昨年９月、ツアー再開後最初の全米オープンで２回目の優勝を果たしました。その決勝戦も、第１セットを奪われてしまいます。この３０年あまりでは、決勝で最初のセットを奪われた選手が優勝したことは無かったのですが、彼女は冷静に自分を切り替え、そこから２セットを連取して優勝したのです。スランプにも、コロナによる苦境にも、そして１セット先取された逆境にもくじけることなく、冷静に前を向いて進んで得た最高の結果です。

試合後、優勝スピーチが行われましたが、その最初に出てきた言葉は、これまで彼女を支えてくれた人達への感謝の言葉でした。対戦相手の選手、自分を支えてくれたコーチなどの

仲間や、大会に関わったすべての人たち、いつも見守ってくれた家族、そして応援してくれたすべての人に感謝の言葉を述べています。優勝したのは自分だけど、自分一人で優勝できたのではない。自分を支え応援してくれた人達がいたから優勝できたのだといい、そのすべての人達に感謝を捧げているのです。

そしてもう一つ、この大会を通して彼女は、自分がつけるマスクに、これまでアメリカで人種差別を背景として理不尽に命を落とした黒人の人達の名前を記していました。試合後のインタビューで、そのことでどんなメッセージを伝えたかったのかと問われた彼女は、概ね次のように答えています。

「私は、十分なことを知っている訳ではないけれど、そして説得力も無いけれど、これをきっかけのより多くの人達が黒人差別の問題について話しあうようになって欲しい」

彼女自身、母は日本人ですが父はハイチ出身のアメリカ人なので、黒人差別の問題を他人事のようには思えなかったのかもしれません。しかし、自らは世界でもトップクラスのテニスプレーヤーであり、そのために身を削るような努力をしなければなりません。そんな中でも彼女は、社会が抱えている問題に対して、自分なりに考え、しっかりと発信しているのです。

高校を終え自立への一歩を踏み出す皆さんも、是非この大坂選手のように、「どんなことにもくじけず前を向いて進む力」と、「自分を支えてくれる人達への感謝の心」、そして、「社会が抱える問題に対する積極的な行動」を持ち続けて欲しいと思います。

これからの時代は、情報通信技術やＡＩが発達し、これまでの社会から大きく変容していくと考えられています。そのスピードも非常に速く、これまでの知識や経験だけでは容易に対応できないかもしれません。そんな時代に向かうからこそ、先に述べた三つのものを持ち続けて欲しいのです。

そして、これらの素養は、皆さんが本校で過ごした３年間で、しっかりと身についているはずです。それを生かして、これからの社会を逞しく生き抜いてください。

毎朝、玄関に立っていると「おはようございます」と、笑顔で、あるいははにかんで挨拶をしてくれた皆さん。登校終了日以降は顔を見られず、少し寂しく感じていましたが、いよいよこれでお別れです。

仲間と過ごしたこの辰巳の丘での時間、カリヨンの響き、ニケ像の姿、これらをしっかりと胸に刻み、新たな道へと歩み出してください。卒業生の皆さんが、世界に羽ばたき、あるいはふるさと石川の発展に貢献し、幸多き人生を歩まれることを願って式辞といたします。

令和三年三月二日

石川県立金沢辰巳丘高等学校

校長　山下　一義